



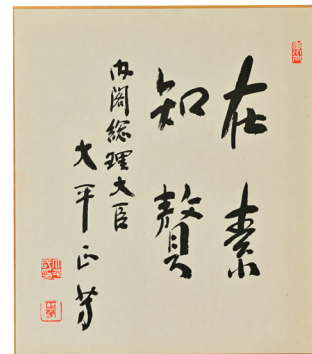
おお ひら まさ よし
大平 正芳

1910年、現観音寺市生まれ。経済学部の前身となる高松高等商業学校卒業。1952年に香川二区から衆議院議員に初当選し、政界に入る。内閣官房長官、外務大臣などを経て1978年に第68代内閣総理大臣に就任するも、1980年6月、衆参同日選挙中に急病で倒れ逝去。深い洞察力に満ちた時代認識と哲学味豊かな政治観、そして優れた外交手腕は今もお高く評価されている。

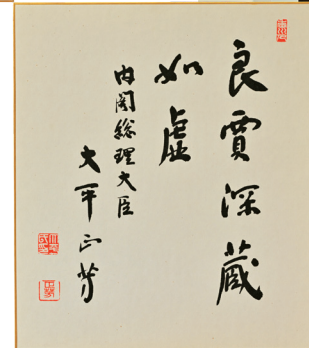


そんなとき、たまたま訪れた香川大近くの喫茶店の店主から「香川大に、大平先生の銅像があるよ」と聞いてびっくり。先生が香川大卒であることはもちろん存じ上げておりましたが、そこまで深い関係があるとは知らなかったからです。すぐに香川大を訪ね、寄贈を申し出しました。

仕事の関係で、多くの政治家とお会いする機会がありました。大平先生は他の政治家とまったく違いました。非常に勤勉で、知識も豊富にあるのに、それをひけらかそうとしない。偉そうな態度を一切とらず、誰とも公平に付き合う方でしたので人望もありました。先生からいただいた色紙のなかに『良實深蔵如虚』があります。先生は東京・神田の古本屋に通い、中国の書物をたくさん読まれておりしたので、そのなかで琴線に触れた言葉を書き留めたのだらうと思います。「良實」はすぐれた商人という意味で、賢者は自分の才能や知識をみだりにひけらかさないことを意味しています。もう一枚の『在素知賢』は、大平先生が好んで使っていた言葉。暮らしては質素にして知力を贅沢に身につけようという意味です。どちらの色紙にも、先生の生き様をそのまま表したかのような言葉が綴られています。「大平正芳文庫を通して、香川県からこんなに立派な方が輩出されたことをぜひ知っていただきたいです。」



大平氏が、マブチモーターの社員にプレゼントしていたという直筆色紙。写真の2点以外にも「尽凡心開天地(平凡な心があるところに天地がひらける)」や「丹心照萬古(真心から出た行いは、永遠に光り輝くものである)」など全5点が飾られています。



経済学部「経済研究所」のなかに、香川大の卒業生、大平正芳元総理大臣の功績を伝える展示コーナー「大平正芳文庫」が設置されました。ここに展示している大平氏直筆の色紙や著書などは、中山さんが大学に寄贈したもの。その経緯とは？

岡田所長に聞く

学生の研究に活かせる 貴重な資料たち

大平さんは、東京に行ってから香川大のことを大切に思ってくれていました。経済研究所が入っている建物「交友会館」の入り口左側に大平さんの銅像があります。これは大変貴重なものです。というのも大平さんは偶像崇拜を嫌がっていたのですが「例外として、後輩たちの激励になるのであれば、母校のみ許可する」として特別に建立が許されたもののなのです。建立するにあたっては（銅像に肩書きは一切つけないこと）（尊称抜き表記にすること）を厳格な条件にされました。謙虚な姿勢がにじみ出ていますね。

私は経済学のなかでも、福祉国家を財政面から研究する「福祉国家財政論」を専門に研究しています。大平さんが1979年に国会で演説した「日本型福祉社会論」は、日本にとって、そして世界中の福祉国家にとって大きなターニングポイントとなりました。大平さんの考えは、日本の伝統的な家族に立脚して福祉予算を抑制しようというものであったので「福祉の切り捨てだ」と批判



経済研究所所長
おかだ てつたろう
岡田 徹太郎

千葉県出身。東京大学経済学研究科現代経済専攻修了。1999年に香川大学助手、2000年カリフォルニア大学パークレー校客員研究員を経て、2011年より経済学部教授、2021年より現職。専門は経済政策論、財政学。

的な意見も多く集まりました。しかし、あのまま無尽蔵に福祉を拡大していれば、財政に無理がたたって国は破綻していたはず。実際に、80年代になるとイギリスや北欧が進めてきた福祉国家は行き詰まり、維持可能な福祉国家を目指して大きな方向転換を余儀なくされました。そうして形を変えながらも、福祉国家は21世紀の今まで残っているわけです。どうして暗中模索の時代に、あんな政策を打ち出せたのか。中山様から寄贈いただいた資料を社会科学の視点から紐解いて研究したいと思っています。学生たちにもぜひ、これらの資料を自分の研究に活かしてほしいです。資料の貸し出しはできないものの「大平正芳文庫」は一般公開しています。市民の方にもぜひ、足を運んでもらいたいです。



ナビゲーター

なかやま のぶゆき
中山 信之

高松市出身。大平氏が顧問を務めていた東京の会社、マブチモーターの元専務。マブチモーターを創業した馬淵兄弟は、高松市の出身。東京で大平氏と知り合い、同郷のよしみから絆を深めた。

マブチモーター引退後、しばらくは千葉県で生活をしておりましたが、安住の地を求め、ふるさと香川県に帰ってまいりました。90歳も目前となり、終活をはじめたものの、大平先生からいただいた色紙や著書をどうすべきか頭を悩ませておりました。もちろん私にとってはすべて宝物ですが、私の家で眠らせたままではいいのだろうか疑問に思いはじめたのです。